

昔話の現代的価値

—一九九〇年代生まれの女子大学生の回答より—

設 楽 馨

一、目的

日本に生まれ育った多くの日本人には、学校で先生に教えてもらった、という記憶がなくても知っている、そんな物語がいくつあるのではないだろうか。童謡で歌ったり、カルタなど遊びのなかに溶け込んでいたりする、そうした物語として、一寸法師やウサギとカメ、桃太郎、浦島太郎、かぐや姫などの昔話は、多くの人が想起するものだと思う。これらの話は、長い月日のなかで語り継がれてきた物語であり、現代では絵本や、インターネットのサイトで文字化されたものを読むことができる。また、アニメを見たり朗読の音声を聞いたりすることもある。一例に過ぎないが日本で生まれ育った筆者が見聞きした昔話には、一寸法師など有名な話のほかにも、「むかしむかし」で始まり、伝聞「そうです。」や結果「たのです」「てしましました」によって閉じられ、「おしまい」で締めくくられる、いくつもの話があったことを記憶している。それらは、善悪や美醜に従ってほうびや罰を伴う内容が多く、価値観や推奨すべき道徳観の基準を提示している。単純な構成で社会規範を論じ、日本らしさのなかに、日本ならではの規範意識や判断基準を示すものだと考えられる。

そこで、昔話から日本語日本文学に根差す規範意識を調べることはできないだろうか、と考えてみた。日本人にとって身近

な昔話は、何を訴え、次世代に継承していくのか。昔話を解釈して読み取った道徳観や価値基準を考察してみよう。そして、昔話を持つ道徳観などが、現代において価値を持っているのか、持っているとするればどのようなものであるのか、考えてみたい。

二、方法

本学で司書課程科目「児童サービス論」を履修する一三六人に対し、子どもの発達に役立つ昔話として一位から三位まで三作品を選び、選んだ理由を自由記述で回答してもらった。本稿で昔話として取り上げるものは、「デジタル絵本サイト」のホームページ上に掲載された三一作品とした（第四章に表題一覧を示す）。昔話は口承によって伝達されてきたものであり、異説と称してよいかどうかさえためらわれるほど、様々な異同があったり、表題が異なっていたりすることがある。このホームページに限定することで、大学生がそれぞれに親しんできた昔話の異同を解消し、表題を固定するねらいがある。回答の同定手続きは、表題を基準とした。

「デジタル絵本サイト」は、目次に昔話、民話、神話、現代的なオリジナル作品などの分類が設けられ、昔話は前述のとおり三一作品だが、目次のページに昔話以外の作品のリンクが張られていて、回答のなかにそれらが混ざっていることがあった。集計では、昔話以外の作品は省いた。

三、構成

考察に先立ち、次の四章では結果として全三一作品の得点を計算して示す。得点とは、一位に選ばれた昔話に三点、二位に

二点、三位に一点というように重みを付けて総合点を出したもので、人気の高低を判別しやすいようにしたものである。

次に、各作品のどこに注目して選択されたものなのか、形態的特徴と得点の関連を確認する。これは、回答者の自由記述のみによって分析することが妥当であるか、ということを検証するためである。結果を先取りすれば、形態的特徴は重視されず、作品に描かれた価値観（主に道徳観）が重要視されていることが確かめられた。

よって、五章で自由記述の回答結果を用いて、重要視された価値観を整理する。なお、結果や考察に引用する記述内容は、回答のままを重視し、用字や記号使いなどは特に統一していない。提示はアイウエオ順とし、記号（ア）から（セ）を振った。四章と五章の結果について六章で考察し、昔話の現代的価値を整理する。なお、七章では選択されなかった昔話についてのどのような点が嫌悪されたのかについても簡単に触れておく。

四、結果（得点）

全三一作品の総合点の結果と、内訳を示す。

○ウサギとカメラ	一八三点（一位三八名、二位二二名、三位二五名）
○うばすて山	八七点（一位二一名、二位九名、三位六名）
○笠地藏	八〇点（一位一七名、二位一〇名、三位九名）
○舌きりすずめ	五六点（一位五名、二位一八名、三位四名）
○花咲かじいさん	五三点（一位一〇名、二位七名、三位九名）
○おむすびころりん	四九点（一位五名、二位一名、三位二名）

- さるかに合戦 四〇点（一位 七名、二位 五名、三位 九名）
- かちかち山 三七点（一位 六名、二位 六名、三位 七名）
- 鶴の恩返し 二五点（一位 一名、二位 六名、三位一〇名）
- 浦島太郎 二四点（一位 三名、二位 四名、三位 七名）
- 桃太郎 二〇点（一位 四名、二位 二名、三位 四名）
- わらしべ長者 一九点（一位 二名、二位 五名、三位 三名）
- 米のなるへちま 一八点（一位 〇名、二位 七名、三位 四名）
- こぶとりじいさん 一三点（一位 一名、二位 四名、三位 二名）
- おにばばとこぞう 一点（一位 三名、二位 一名、三位 〇名）
- てんぐのかくれみの 一点（一位 二名、二位 一名、三位 三名）
- 天の羽衣 一点（一位 一名、二位 四名、三位 〇名）
- かぐや姫 七点（一位 〇名、二位 二名、三位 三名）
- 骨になつた娘 七点（一位 二名、二位 〇名、三位 一名）
- ホトトギスの弟 六点（一位 〇名、二位 二名、三位 二名）
- 金太郎 五点（一位 〇名、二位 二名、三位 一名）
- 夜泣きなおしのお地蔵さん 四点（一位 一名、二位 〇名、三位 一名）
- さる地蔵 三点（一位 一名、二位 〇名、三位 〇名）
- ぶんぶくちやがま 三点（一位 〇名、二位 一名、三位 一名）
- 神様のうちわ 二点（一位 〇名、二位 一名、三位 〇名）

○クラゲのほね	二点（二位）	○名、二位	○名、三位	二名
○炭焼き長者	一点（二位）	○名、二位	○名、三位	一名
○大工と鬼六	一点（二位）	○名、二位	○名、三位	一名
○のこぎりの鬼刃	○点			
○山んばと魚売り	○点			
○竜の子太郎	○点			

ここで各作品の形態的特徴と、得点について簡単に触れておく。分量について、ページ数で検討すると、一〇ページ（ウサギとカメ）「天の羽衣」など五作品）から二四ページ（うばすて山）までの開きがあった。二番目に人気のある「うばすて山」が最多のページ数であることを考慮すると、分量が少なければ人気がある、ということではないようだ。さらに、登場人物の数や、絵柄、語り口についても、特に得点と関連し、各作品の人気に影響しているとは言えない。

作品を構成するものの一つとして、登場人物（特定の動物や、「鬼たち」のような集団も一人として数える）の数を調べると、最少で二名（ウサギとカメ）「山んばと魚売り」、最多が七名であった（かぐや姫）「桃太郎」など五作品）。二名の作品は一番人気のあった一八三点の「ウサギのカメ」と、○点の「山んばと魚売り」があり、人数が少なければ人気が高い、もしくは、人気が低いということではないことがわかる。また、最多七名の五作品も点数には大きなばらつきが見られ、登場人物の多少が人気に影響しているとは考えにくい。選択理由の記述では、わずか一回答のみに、「桃太郎」で登場人物が多いことが、子どもの興味を引き、子どもの想像力を養うために役立つという意見が見られた（引用（ア）参照）。

引用（ア）鬼、イヌ、サル、キジなど、様々な動物（？）が登場するので、子どもが興味を持ちやすいのではないかと思

う。子どもの想像力を養うのにいいのではないか。

絵は、一般公募を含む一四名が描いている。そのなかで山田雄太は、「ウサギとカメ」、「てんぐのかくれみの」、「ホトトギスの弟」、「さる地蔵」と最も多い四作品を手掛けている。同じ人物の手による絵であれば共通性があり、その絵柄の好みが作品の魅力となつて昔話の人氣に影響するのか検討してみたが、山田雄太の四作品は一八三点から三点まで開きがあり、そのほか三作品を手掛ける別の画家の作品群を見ても得点の偏りはない。よつて、特定の画家の作品に人氣が集中するとは言えないものとみなした。選択理由において、絵柄の記述があつたのは、わずか二名であつた(引用(イ)(ウ)参照、なおこの引用は同一回答者の部分抜粋)。

引用(イ) イラストの色づかいがカラフルなことで子どもに楽しんで読んでもらえるのではないかと感じました。「花咲かじいさん」を選択、画家は大熊ゆり子

引用(ウ) 与えられている好意に甘えてばかりいると最終的には見はなされて不幸になる、といった内容の絵本の中で一番日本らしいイラストと色づかいだったので、良いと思いました。「鶴の恩返し」を選択、画家は北井りか

語り口(文体)は、ほとんどが共通語の丁寧体であるが、「夜泣きなおしのお地蔵さん」一作品のみ、口語の方言を色濃く反映している(次の例を参照)。

【例・共通語の丁寧体】 あるところに、一人のおじいさんが住んでいました。

【例・「夜泣きなおしのお地蔵さん」】 むかーしむかしのことじゃった。(中略) お地ぞうさんっちゃ、とつとこが好きらしい

もんで、とつとをばおそなえせんきや、ごいやくないんだとね。(後略)

では、これらの昔話のなかでどのような点が注目され、人気の有無が決したのだろう。自由記述による選択理由を見ると、各作品の内容から学習できる事柄として、努力を惜しまず研鑽すること、秩序を守り他者に迷惑をかけないこと、残忍な行動を慎み思いやりや優しい気持ちを持つことなどが挙げられている。つまり、作品に描かれた価値観、とりわけ子どもが道徳的に正しいことを決めるときに、どのような判断をするべきか、という観点から「良い話」が選別されている。そこで、この記述を詳しく見て整理して示す。

五、結果(記述)

まずは、人気の高かった作品ごとに整理しよう。人気が高い、つまり、回答数の多かった「ウサギとカメ」や「うばすて山」、「笠地藏」、「舌きりすずめ」には、そのほかの作品の回答と重複する道徳観が存在する。この四作品から代表的な指摘をくみ上げたうえで、他作品に見られたいくつかの道徳観を示すこととする。

(1) 油断禁物、努力と粘り強さで願いは叶う

「ウサギとカメ」は、ウサギとカメがウサギの得意な「走ること」で競争し、勝つであろうウサギが油断したために、最後まで諦めなかったカメに逆転される話である。登場人物は、表題にあるウサギとカメだけであり、二者の対比はそのまま二種の道徳的定義に直結する。それが、自身の能力を過信するあまり油断して勝負に負けるウサギと、相手の優位を認めながらもたゆまぬ努力によって勝利を手にするカメである。回答をまとめると、奢りや油断、それにも増して努力によって未来を切り

開く勤勉さが推奨される、というものであった。とはいえ、一位から三位まで含め全七五名の回答には、競争心を持つことの重要性や目的を明確にすることの重要性など、少数意見もないわけではない（引用（エ）（オ）参照）。ただ、これに引き換え、七五名中、六一名の圧倒的な意見として、「努力」という言葉が見られ、以下の他作品においていちいち数を示さないものの一作品に対する解釈およびその評価には、明らかな傾向が見られた。以下の作品では、少数意見を置いて、作品ごとに見られた傾向を示すこととする。

引用（エ） 子どもたちに競争心を与えることができる作品だと思います。

引用（オ） ウサギはカメに勝つことをめざしていた、カメはゴールをめざしていた、この2匹の目的のちがいがこのレースの勝ち負けの一番の理由ではないかと思う。勝負や物事をすすめるとき目的を明確にすることが大切だということをお伝えられる話だと思ったのでこれをえらびました。

（2） 高齢者への敬意を忘れない

「うばすて山」は、親孝行な兄弟が、とのさまの決まりに従って一度は年老いた父を山へ捨てたものの、父（年寄り）の知恵を見直させて、決まりを改めてもらい、みんなで仲良くくらす、という話である。ここで年寄りの知恵は、隣の国から出される難問を解決し、国を守るものとなっていて、年寄りしか持ち得ない知恵の素晴らしさや、親孝行な子どもの姿が重要視される（引用（カ）（キ）参照）。長幼の礼を重んじ、年の功を尊重するのである。

引用（カ） 様々な経験をしてきた「人生の先輩」であるお年寄りを尊敬し、いたわることが大切だと考えたので選びました。

引用（キ） 知恵や知識の大切さや、家族の絆が分かる作品であると思います。

（3） 善行を励行し、清貧に生きれば恩恵を得る

「笠地蔵」は、貧しいおじいさんが雪にまみれたおじぞうさまのために売れなかつた笠と自分の手ぬぐいをかぶせて帰り、正月の支度ができぬまま年越しの夜を迎えたとき、おじぞうさまから米と宝をもらい、おばあさんと楽しい正月を迎える話である。おじいさんとおばあさんの貧乏生活は逼迫していて、おじいさんの善行は優しさや思いやりのこもった行為であるといえ、我が身の生活を犠牲にしかねない。それにも関わらず、おばあさんは二人元気でいられることに感謝して、仲良く年を越そうとする。おじいさんの心温まる善行、おばあさんとの清貧な暮らしぶり、これらがあつてこそ、おじぞうさまからの予期せぬ贈り物という恩恵を得られるのであり、思いやりや優しさから起こす善行はやがて自分へ良い結果として返ってくるものだという因果関係が重要視される（引用（ク）参照）。

引用（ク） 損とか得とかではなくて物に対してでも慈しんだり優しさを持つて接することに對して肯定的に受けとめられると思ひました。貧しくても自分のことだけでなく周りのことを考えられるおじいさんを見て、心が温まり、物や人に対して優しくすることの大切さを感じることができると思ひます。

（4） 因果応報、だから悪行は慎む

「舌ざりすずめ」は、すずめにエサをやるおじいさんと、それをこころよく思わないおばあさんが、それぞれすずめに対する行為に應じ、すずめから禍福をもたらされる話である。おじいさんが善で福を、おばあさんが悪で禍をもたらされるという善悪の対比があり、「笠地蔵」のように善だけが描かれるのではない。そのため、悪がどのようなことであるのか（弱者をい

じめる、欲を張る）、また悪には罰が付随する、凶事を避けるために悪いことをしない、といった悪行の阻止に重点が置かれる（引用（ケ）参照）。

引用（ケ）貧しいからといってすずめのような小さな命を軽んじず、助けたりすると良いことがあるし、逆に下心を持つて助けたりすると悪いことがおこる。悪いことをすればいつか自分に返ってくるという大事な教訓であるから。

（5） 相手を許す、相手との約束を守る

ほかには、「さるかに合戦」や「かちかち山」といった、悪行の末に退治される者を許す場面があるものについて、許してあげることの大切さを指摘する回答があった（引用（コ）参照）。また、「鶴の恩返し」や「浦島太郎」といった禁を犯す場面があるものについて、約束を守ることの大切さを指摘する回答があった（引用（サ）参照）。これらは、対人関係を築くために相手を尊重し、誠実に接することを重要視している。

引用（コ）悪いことをしたら返ってくるということや、もししてしまっても心から謝ればやり直せることが学べると思えます。（「かちかち山」を選択）

引用（サ）このお話には、「他の人に親切にすること」そして「約束を守ること」の2つの大切なメッセージがあると思うから。（中略）約束を守らないと幸せは逃げていってしまうことを子どもに伝えたい。（「鶴の恩返し」を選択）

六、考察（昔話の現代的価値）

以上の結果から、昔話が現代に伝える道徳観として、「してはいけない」という形式と、「すべき」という形式にまとめて六点を示す。

- (1) 競い合うときには、最後まで諦めず、努力を怠ってはいけない
- (2) 因果応報であるから、悪行はしてはいけない
- (3) 因果応報であるから、善行は進んですべき
- (4) 経験豊富な人物の知恵を尊び、高齢者へ敬意を払うべき
- (5) 競い合うときには、奢ったり油断したりしてはいけない
- (6) 相手を尊重し、誠実に付き合うべき

ここに挙げた六番までの並びは、回答の多い順である。前章に挙げた(1)から(5)までは、作品別に見られるものとして見出しを付けたが、改めて、一作品に複数の道徳観が込められている場合は分割し、多作品に重複する観点は統括した。(1)から順に説明を付す。

(1)は「ウサギとカメ」のカメに注目した場合に見られる考え方であった。「してはいけないこと」として「最後まで諦めない」、また「すべきこと」として「努力」が挙げられていた。

(2)は「舌きりすずめ」のおばあさんで取り上げたが、ほかに「花咲かじいさん」や「米のなるへチマ」に登場する主人公のやさしいおじいさんに対する、となりのいじわるなおじいさんに注目した場合に見られる考え方であった。

(3)は「笠地蔵」のおじいさんのほかに、「舌きりすずめ」や「おむすびころりん」、「鶴の恩返し」で動物に親切にするおじいさんに注目した場合に見られた。人間ではないおじぞうさまやすずめなどに思いやりを持って優しく接することは、ただ

善行を推奨する話としてではなく、誰にも見られていないところでも善行をすればいずれ恩恵を得る、という拡大された解釈に至るものも見られた(引用(シ) 参照)。

(4) は「うばすて山」の親孝行な兄弟、(5) は「ウサギとカメ」のウサギから読み取れるものである。

そのほかは少数意見ではらつきが見られた。よって(6) に抽象化して一括した。前章の(5) で述べた「相手を許す」「相手との約束を守る」などの抽象化であり、多作品から読み取れるものである。多作品からの解釈ゆえに、回答数としては多いしかし、ほかの項目と比べて特定の場面としての具体性を欠くため、最後に挙げた。

ここに見られる「してはいけないこと」「すべきこと」は、現代社会に当てはめればごく普通のことであり、常識的な見解である。そうした常識的なことを子どもにもわかりやすく説明するのに昔話は便利であり、利用価値のある物語だということが確かめられた。つまり、六点到まとめたような道徳観は、現代にも通用する昔話の価値とみなすことができるのではないだろうか。

引用(シ) 誰もみていないところでなんらかの行動を起こすことは、例えだれもみていなくてもつながっていくことだということがわかる。例えばトイレのスリッパをそろえる、食器を重ねなおすなど日常におこるささいな気づかいはきつと誰かがみているということが知れる。(「笠地藏」を選択)

七、おわりに

本稿の考察は、調査手法として「子どもの発達に役立つ昔話」を尋ねた結果であるため、見直してみるとまるで小学校低学年の教室に貼られた「今月の目標」の標語のようであった。これを小学校高学年や中学生の発達に合わせるならば、昔話の選

定もそれに応じたものにすべきなのだろう。

ところで記述回答には、逆説的に選ばれない昔話の理由が垣間見えた（引用（ス）を参照）。また、選択したものの、欠点を指摘する回答があった（引用（セ）を参照）。そして○点だった作品は三話、あった。これらから、避けられた昔話について簡単に述べておく。

引用（ス）なるべく主人公が悪い奴を退治したりしないような話をえらびました。人を傷つける話ばかりすると、その子も将来人を傷つけてしまうかもしれないので、他人を思いやれる優しい心の持ち主である話をえらびました。
〔笠地蔵〕「鶴の恩返し」「花咲かじいさん」を選択

引用（セ）（前略）ただ、悪いおじいさんの行いが残酷すぎるように感じました。（「花咲かじいさん」を選択）

○点だった「のこぎりの鬼刃」と「山んばと魚売り」は、登場人物の死によって結末を迎える。同じく○点の「竜の子太郎」は、龍である母の目玉を奪い、そのために盲目になった母に時を知らせる鐘をつく、という結末である。死や残酷な行為があった場合、報いや理由が直後に説明されない話は、残忍性が強く感じられ、避けられる傾向があったのだと考えられる。調査手法において「子ども」を対象に役立つ昔話を想定させたため、わかりやすい因果関係を持つ昔話が多かったであろう。

注

（1）幼児期から「まんが日本昔話」（毎日放送）、これを絵本にしたシリーズに親しみ、また、家族が旅先の土産物として各地で購入した昔話の本などに親しんできた経験を持つ。

（2）デジタル絵本サイト <http://www.e-hon.jp/index.htm> (cited2012/11/20)。このホームページでは、日本の昔話のほかにも、世界の昔話

や民話、神話などが掲載されている。日本の昔話は、<http://www.e-hon.jp/ehon.jp/index.jp.htm> (cited2012/11/20) が目次のページとなっていて、ここから各作品へリンクが張っており、それぞれが絵本の形態で提示されるようになっていて、表題をクリックすることでその作品のページに移る。

(3) ここで各作品の異説を逐一、挙げないが「デジタル絵本サイト」の「さるかに合戦」でサルに虐げられたカニは、怪我の見舞いに来た栗たちに助けられてサルに復讐するが、ある回答者の記述によれば親子のカニのうち母カニが死に、そのかたき討ちに栗たちが加勢する話もある。また、「おにばばとこぞう」の内容は、筆者が知る表題だと「三枚のお札」である。

(4) 結末に注目すれば、一点一点「おにばばとこぞう」もおにばばの死で閉じられる。記述回答では、おにばばよりこぞうの機転や冒険に注目するものが多かった。

(5) デジタル絵本サイトの表記に従い、登場人物の「龍」は表題の「竜」と異字を用いる。

(6) 死を全面に出す「骨になった娘」(七点)については、死や死因よりも用う生者の姿が中心に描かれていて、死を学べる教材とする回答があった。

(したら・かおる 本学助教)